

所長挨拶

デジタルメディアの奔流を誰が残しておくか

つちやもとひろ
土屋 大洋

(湘南藤沢メディアセンター所長)



メディアセンターは時代の流れに追いついていけなくなっている。慶應義塾のメディアセンターだけではない。世界中のメディアを扱うアーカイブや図書館が限界を感じている。溢れる紙の本だけではなく、デジタルメディアの奔流をその中に収めることはとうてい不可能になっているからだ。

古代や中世の書籍は宝物だった。それを持っているだけで権威であり、読み書きができることは、あらゆる種の特権的な地位を意味していた。

しかし、今や数十億の人たちが圧倒的な量を読み書きしている。無論、まだ多くの人たちが十分な教育を受けられず、読み書きできずにいることも忘れてはならない。それにしても、現代の社会において生み出される文章の量は圧倒的である。

そもそも紙の本と雑誌で既存の図書館はいっぱいである。とっておきたいものでも、すべてをとっておくことはできない。何でも揃っている図書館は、日本では国会図書館において他にない。次に揃っているのは某オンライン書店の倉庫だろうか（古本まで扱いだしたことで、絶版本も購入できるようになったのは評価したい）。

それにしても、ソーシャル・メディアの奔流までも収めきれている図書館はないだろう。ツイッターやフェイスブック、ユーチューブといったソーシャル・メディアが出てくる以前のインターネットのコンテンツは、米国のインターネット・アーカイブというプロジェクトが必死に保存しようとしてきた。それも完璧ではなく、一部のサイトを不完全な形で保存しているに過ぎない（それでもインターネット・アーカイブは偉大なプロジェクトだと思う）。

ツイッターで300人ぐらいをフォローしてみると、それこそ滝のようにツイートが流れていく。某国民的アイドルグループがテレビで謝罪を行った際には、その関連のツイートだけでめまぐるしく流れており、とても読み切れなかった。フェイスブックで

も毎日大量のデータが加わってくる。

そうしたコンテンツはサービス提供会社が独自にアーカイブし、インターネット上に分散的に残されていて、メディアセンターはそこへのアクセスを提供できれば良いというのが主流の考え方だろう。

そもそも、ほとんどが個人的な思いをつぶやいているだけだから保存に値しないのかもしれない。

しかし、ツイッターのつぶやきのように誰もがアクセスできるようになっている場合には、半ば公的な言論空間であるという指摘も成り立つだろう。誰かのツイッターでのつぶやきやブログでの書き込みが政治経済を動かす事態につながることもある。中東のチュニジアで始まった革命もそうだった。それなのに、後の世の人がそれを探し出そうにも、行方が分からなくなってしまっている可能性が高い。

さらに、ダークネットやダークウェブと呼ばれる検索エンジンからはたどり着けないサイバースペースもかなり広がっている。

ビッグデータの解析が可能になり、データサイエンティストやデータジャーナリストという職業も生まれてきた。そうした人たちが分析したデータも本来なら適切にアーカイブしておくことが重要だろう。学術論文や大手のジャーナリズムの記事は今のところ確実に収められているが、その外に広がるサイバースペースの荒れ野で繰り返されている言論は、我々メディアセンターの手の届きにくいところで失われつつある。

人類はデジタル情報の拡大という新たな課題に直面している。デジタルデータの保存方法の技術、保存メディアそのものの技術、保存されたデータの検索技術など関連するところでイノベーションが起きないと、人類の知は集約できなくなる。やはり分散的な保存がその解なのだろうか。湘南藤沢メディアセンターは日本の先駆けだったはずだが、もう一度野心的にメディアの保存を考えられないものか。